博士（人間科学）学位論文　概要書

家庭の食を介した親子間相互作用の機能と機序

Function and mechanism of interaction between parent and child through family meal

２００９年１月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

伊東　暁子

Ito, Akiko

研究指導教員：　鈴木　晶夫　教授

論文概要

本研究では，子どもの食態度とその背景としての家庭・親子関係に注目し，これらの関係を分析・検討するものである。食に関する研究は現在様々な分野で行なわれているが，健常な人々を対象とした研究はいまだ十分ではなく，親子関係との関連についても実証研究という面では多くなされていない。

本論文は，全五章から構成され，著者の行なった４つの研究が含まれている。

第１章では食に関連する先行研究を，「健康」，「発達」，「社会」，「文化」の４側面から概観し，食がいかに心身の健康に深く関わっているのか，また発達段階ごとに食態度が変化する様子，食態度の獲得に家庭や文化が及ぼす影響について述べた。

続く第２章では，先行研究から導き出される食研究における課題を三点指摘した。すなわち，健常群を対象とした食行動の法則性の検討の必要性，家族や周囲の人との関係性という立場からの研究の必要性，家庭における食事の意義に関する実証的な研究の必要性である。これらを踏まえ，本研究では，　子どもが最初に食事を共にする家族という集団に焦点を置き，家庭における食事の意義について検討することを目的とした。

第３章では，青年期学生を対象とした調査研究から，食態度と親子関係の関連について検討した。

まず研究Ｉでは，大学生の食態度を規定している要因を探索的に検討するために，調査を行なった。より具体的には，個人属性，過去および現在の食態度，親子関係に注目し，それぞれの変数間の相関関係および因果関係を検討し，過去の家庭における食事経験が現在の親子関係に影響をおよぼしていることを明らかにした。

研究Ⅱでは，食態度を測定する尺度の作成を試みた。研究Ｉでは，食態度を把握するにあたり，適当な尺度がなかったため，先行研究を参考に項目を収集したものからなる調査を実施したが，論を進めるにあたり，食態度を測定する尺度の必要性と有効性を確信したため，研究Ⅱでは尺度の精査も目的とした。さらに研究Ⅱでは新たなサンプルを用いて，研究Ｉで得られた結果をより詳細にわたって比較・検討した。研究Ｉと大きく異なる点としては，過去の家庭での食経験の一つとして弁当に注目し，調査対象者に対して詳しく想起・回答を求めたことが挙げられる。その結果,子どもは母親から与えられた食事に関して評価を行なっており，評価が食行動に影響することが示された。またそれらの経験が親子関係に影響を及ぼしており，時期については，時間の経過はあるものの，高校時代の経験よりも幼少期の経験が大きく影響することが明らかとなった。

第４章では，前章での弁当に関する調査の結果を受けて，食態度を形成する家庭の食

の一形態としての弁当に注目し，幼少期の食を介した親子の相互作用の親側からの検討および子ども側からの検討を行なった。

研究Ⅲでは，養育者側にインタビューをすることで弁当作りの実態調査を行ない，親の立場から弁当（食事）が果たす役割について検討した。具体的には，親が弁当をどのようにとらえ，作っているのかについて調べた。その結果，母親は弁当作りを少なからず負担に思いつつも，子どもから出される要望などを参考にしながら，子どもの体調や食欲にあわせて弁当を作っていることを示す結果となった。

研究Ⅳでは，幼稚園で収集した観察データおよびインタビューデータをもとにして，弁当（食事）が果たす役割について主に子どもの側から検討した。その結果，子どもは全般的には与えられた食事に感謝を示しながらも，無条件で受け入れているわけではなく，評価を行なっていることが明らかになった。また，子どもにとって食事場面は滞りなく食べるための多くの課題が存在しており，周囲の大人の要求に応え，これらの課題を達成していくことで，子どもたちは徐々に自己効力感を獲得していく可能性が示唆された。

第５章では，以上の結果をもとに総合的な考察を行なった。まず，食特有の相互作用の特徴を示し，それらを踏まえた上で，子どもにとって家庭の食事とは，食事を食べる場面における親子間の直接的なやり取り（会話，食べ物をよそう，食べさせる等）だけではなく，用意された食事の内容や準備の様子などを通して，親の意図，感情，動機を推測し，自分が親にどのように扱われているかを認識する手段の一つであると位置づけた。特に幼少期は，食物を滞りなく口に運ぶという面では決してスムーズではなく，親の気持ちを汲み取るというわけにはいかないことも多いが，普段何度となく繰り返される食生活の中で，親の自分に対する態度を感じ取り，基本的信頼感を基盤として，親像や自己像が調整・再形成されていく場であると考察した。

今後，縦断的な研究も必要であるが，本研究から得られた結果は，家庭の食事のもつ機能と構造検討の一助となり，今後の食育のありかたに重要な示唆を与えるものとなった。